

## 日本語プログラムによる日本語学習支援

齋藤 伸子・池田 智子・ミグリアーチ 慶子

キーワード：日本語科目、日本語学習リソースセンター、クラスゲスト、  
ライティング・サポートセンター

### 1. 日本語プログラムの概要（齋藤 伸子）

本学において日本語の授業やその他の日本語学習支援を受ける留学生は、大きく分けて、①学群に所属する学生(学部レベルの正規留学生<sup>1</sup>)、②RJプログラムの参加者(半年または1年の交換留学生)、③サマープログラムなど短期コースの参加者、④大学院生の、4つのカテゴリーに当てはまる。日本語レベルは、未習者から上級者までさまざまである。以下、このうち①と②を対象とする日本語学習支援について紹介する。なお、これらの日本語支援は基盤教育院の外国語教育部門の日本語プログラムにおいて行っており、これらの日本語学習支援全般を総称して「日本語プログラム」と呼ぶ<sup>2</sup>。

### 2. 日本語プログラムの目標と方針（齋藤 伸子）

日本語プログラムは、以下の目標と方針に基づいて運営されている。

#### ○ 多様な背景とニーズに応えるカリキュラム

世界中のいろいろなところから異なる背景をもって集まる留学生の多様な背景とニーズに応えるため、個別学習のシステムを導入し、多様な選択科目を設けている。言語形式に焦点をあてた科目だけではなく、日本語を使って日本の社会や文化に対する理解を深めて考察できる力を養うことを目指した科目も開講している。

#### ○ 「日本で日本語を学ぶ」ことを生かす

第二言語環境にある留学生が、教室の内だけでなく、教室の外で日本語を使いながら勉強することによって、日本語のコミュニティの一員になることを目指す。

#### ○ 自律的に学習できることを目指したプログラム

それぞれの学生が自律的に学習を管理し、各自の目標に合わせた努力ができるようになることを目指して、自律学習を基盤とした科目「チュートリアル」を開講し、日本語学習

リソースセンター (CJL) やライティング・サポートセンターを通じた教室外サポートを提供している。

### ○ 人と人との交流を重視した学習環境づくり

言語学習は教科書や辞書のみを使って行うものという言語学習観から脱却し、世の中のさまざまなものから日本語を学べることを伝える。特に人と人との交流を重視し、教室外での言語運用に重点をおいた体験活動や、桜美林大学の学生が「クラスゲスト」として参加する授業を多く設けている。

## 3. 日本語科目の特徴 (齋藤 伸子)

日本語プログラムで提供している日本語科目は、2014年度には各学期 34 科目 106 クラスが開講される。

### 3-1. 日本語科目の構造

日本語プログラムの開講科目は、以下のような構成となっている。

科目	対象	内容
日本語専門基礎 A I、A II、B	学群留学生	留学生が学群の科目を履修して単位を取るために必要なスキルと自律的な学習者になるための方法を学ぶ。1年次相当のコア科目。春秋計10単位必修。
日本語 I ~ V <sup>3</sup>	RJ 留学生	入門から上級まで9レベルに分かれ、「読む・書く・聞く・話す」の四技能を総合的に学習する。基本的に必修扱い。レベルにより2~6単位。
日本語演習	学群および RJ 留学生	特定の分野を強化したり弱点を補強したり、興味のある分野を学んだりするための科目。すべての留学生が自分に合ったレベルの科目を選択することができる。各1単位。

### 3-2. 日本語科目の特徴と内容

以下、日本語科目を、開講の目的ごとに紹介する<sup>4</sup>。なお、科目名の右に「春・秋 各2単位」等と記述されているのは、科目が開講される学期と取得単位数である。日本語専門基礎のみ、春秋両学期必修となっているため、年間をとおした取得単位数を「計4単位」等として加えた。

#### <学群留学生のための必修コア科目>

- ・「日本語専門基礎A I」 春・秋 各2単位、計4単位

初年次終了時点でレポートが書けるようになることを目標にして、書き言葉の表現、パラグラフライティングから、レポートの構成、書き方の手順をスモールステップで学ぶ。

- 「日本語専門基礎AⅡ」 春・秋 各2単位、計4単位

講義の聴き方、論説文の読み方、ニュースや新聞を読むスキル、ノートやリアクションペーパーの書き方を実践的に学ぶ。大学の勉学に必要な語彙や文法の知識の整理も行う。

- 「日本語専門基礎B」 春・秋 各1単位、計2単位

それぞれの学生が自分自身の目標と学習計画を立てて学習し教師が個別に支援する、チュートリアル形式の授業。弱点や伸ばしたい点を集中的に学習して日本語力の向上を図り、自分の学習スタイルを知り、自分で学習を管理する能力を身につけることを目指す。

### < RJ 留学生のための必修科目 >

- 「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」 春・秋 各6単位

Ⅰは入門レベル、Ⅱは初級後半までのレベル。基礎的な語彙および文法項目の習得と、実際場面での運用力をつけることを目的とし、Ⅱの初級レベル終了時に、日常会話で意志の疎通ができ、漢字約300字と基本語彙1500語程度を用いた作文が書けるようになることを目指す。

- 「日本語Ⅲ」「日本語Ⅳ」 春・秋 各4単位

Ⅲは中級前半レベル、Ⅳは中級後半レベル。身につけた四技能をさらに伸ばし、場面に応じて適切に話すことができるようになることから始め、日本語による講義や討論に参加し、交友を深めるための知識と技能の基礎を習得することを目標とする。日常生活や勉学における中核的な語彙・表現や文法事項を、新聞・ニュースなどの言語素材から学ぶ方法を知り、実生活上の課題を通して口頭表現、文章表現の技能を学ぶことを目指す。

- 「日本語Ⅴ」 春・秋 各2単位

上級入門レベル。日本語による講義や討論に参加し、勉学を進め、日本人学生その他、周囲の日本語話者と交友を深める力をつけるため、知識と技能の向上を目指すと同時に、担当教員やクラスメイトとの相談や討論を通して学習を自己管理する能力の向上を目指す。専門分野の入門書や新聞などの語彙・表現・文法を学び、速く多くの日本語を処理し、自らのことばで他者に向けて語ることなどを習得すること、教室内外での学びを総合的に振り返り、自分自身で学習を進めていく力をつけることを目指す。

### < 自律的な学習の力をつけることを主な目的とした科目 >

- 「日本語演習(チュートリアル)」 春・秋 各1単位

自律学習の理論に基づき開講される、桜美林大学日本語プログラムの特色ある科目。学

生は、個別に設定した学習目標と学習計画に従って、教員の支援、アドバイスを受けながら学習を進める。内容は、弱点強化や特に興味のある日本語の学習分野など、個人によって異なり、学習進度も個別の目標に応じて設定する。各自が今後の学習に役立つ自律的な学習姿勢を養うことが目的である<sup>5</sup>。

#### <学習スキル・ストラテジーの習得を主な目的とした科目>

- ・「日本語演習（漢字Ⅰ、Ⅱ） 春・秋 各1単位

漢字の構成要素の分解やグループ分け、自分にとって必要な漢字や覚えるべき漢字を自ら選ぶ活動などをおし、漢字に対する自律的なアプローチを広げられるようにする。

#### <日本語のスキルの習得を主な目的とした科目>

- ・「日本語演習（初中級・発音トレーニング）」 春・秋 各1単位

日本語の母音、子音、リズム、イントネーション、アクセントなどを、身体を使って学ぶと同時に口頭能力全般も伸ばす。

- ・「日本語演習（口頭表現Ⅰ～Ⅲ）」 春・秋 各1単位

日常生活や大学での学習に必要な基本的な表現と語句、効果的なコミュニケーション、感情の表現、社会的な話題や文化の違いに根ざした表現など、口頭表現の技術を学ぶ。

- ・「日本語演習（文章表現Ⅰ～Ⅲ）」 春・秋 各1単位

メモやEメール、自分の意見から、大学の講義やゼミの発表原稿、レポートが書けるようになることを目標として、文章の表現に関する知識と技術を学ぶ。

- ・「日本語演習（読解Ⅰ～Ⅲ）」 春・秋 各1単位

社会・文化などに関わるさまざまな素材を取り上げ、読む力を向上させることを目指す。速読と多読から、より深く内容を掘り下げて読むことまでを目標とする。

- ・「日本語演習（上級・聴解とノートのとり方）」 春・秋 各1単位

日本語母語の学生とともに大学の講義を聞く上で必要な、聴解やノートの取り方などのスキルを、実際の学群の講義を聞きながら練習する。

- ・「日本語演習（上級・大学のレポートの書き方）」 春・秋 各1単位

書き言葉を用いて正確で論理的な文章を書くために、パラグラフライティングの練習、パラグラフをつなげてレポートを書く練習をする。

#### <社会とつながる運用力の強化を主な目的とした科目>

- ・「日本語演習（初級・体験活動）（中級・体験活動）（上級・体験活動）」

春・秋 各1単位

生きた日本語の多様な表現に触れること、コミュニティ、現実の社会や文化に触れること、日本語で行動する際の自信をつけること、教室外での学習方法を考えること等を目標とし、レベルに応じた言語面の準備を行ったうえで料理、伝統文化体験、部活動訪問などの教室外活動を行う。

- ・「日本語演習(上級・職業コミュニケーション)」 春・秋 各1単位

オフィスにおけるビジネスの日本語、アルバイトでの日本語など、職業生活における日本語について、よりよいコミュニケーションのための知識と技術を学ぶことを目指す。

- ・「日本語演習(上級・地理と歴史の用語)」 春・秋 各1単位

日本の小中学校で学ぶ地理と歴史の用語・表現を学び、学群の講義、新聞・ニュース、日常のコミュニケーションの背景等を理解し、話題に参加できるようになることを目指す。

- ・「日本語演習(上級・ニュースと新聞)」 秋 1単位

新聞やニュースの内容の把握とディスカッションを通じて、現代の日本をめぐるさまざまなテーマへの理解を深める。また、報道表現の構成・定型表現や語句を習得する。

#### <日本語知識の習得を主な目的とした科目>

- ・「日本語演習(中級・初中級文法)」 春・秋 各1単位

日本語の基本的構造に深く関わる文法項目をさまざまな場面で適切に使えること、他の言い方と使い分けられることを目的とする。また、文法の習得方法を学ぶことも目指す。

- ・「日本語演習(上級・上級文法)」 春・秋 各1単位

上級の文法を知識として覚えるだけでなく、会話や文章を通じて、仮説を立てて質問を考え、参考書や周囲の人の助けを借りながら文法を習得する方法を学ぶことを目指す。

- ・「日本語演習(上級・対照表現演習・日中)」 春 1単位

中国語の論説、文学、ビジネス文書等を、文構造や語句に習熟した上で、より自然な日本語に訳す。その過程で両言語の文法、語彙、文化の相違など、多様な側面を学ぶ。

- ・「日本語演習(上級・対照表現演習・日朝/日韓)」 秋 1単位

コリア語と日本語の音声、語彙、表現、文法、談話などの相違点を対照言語学の側面から体系的に学習し、両国の文化、考え方の違いを知り、社会への関心と理解を深める。

#### <文化をとおして日本語を学ぶことを主な目的とした科目>

- ・「日本語演習(中級・現代大衆文化)(上級・現代大衆文化)」

春・秋 各1単位

J-pop、映画、ドラマ、アニメ、ファッションなどの若者文化を通じて、現代の日本の大衆文化を理解し、最新の語句や表現を学び、日本の現代大衆文化への理解を深めること



CJL の受付担当の日本人学生、日本語学習支援グループのスタッフ、リベラルアーツ学群の「日本語教育実習」履修中の学生たちを対象としたものである。しかし、利用者のほとんどが留学生であることに変わりはない。

## (2) 開室期間・時間

毎学期、授業開始の1週間後から授業最終日までの間、授業のない日を除く毎日(月～金曜日)、11:45～17:45まで開室している。受付の学生の勤務のシフトを組む都合上、授業の初日からではなく学生の時間割が決まってからの開室となっている。

## (3) 場所

初年次のコア(必修)科目の授業が主に行われる学而館の一室に設けられている。同じフロアのごく近くに日本語プログラムの講師室である「日本語スタッフルーム」および日本語授業の専用教室があることが、運営・利用の両面で大きな意味を持っていると言える。CJLの前の「フリースペース」にはコピー機、雑誌や新聞が置ける棚、テーブル(4つ)、ホワイトボードがあり、図書館と同様静かに利用しなければならないCJLに入室せず、こちらで勉強をする学生も多い。



日本語学習リソースセンター(CJL)



CJL 前のフリースペース

## (4) リソース

CJLは、その名が示すとおり日本語学習のリソースを提供する施設で、以下のような日本語学習者用教材・学習リソースおよび一般向け書籍その他を揃えている。

- ◎図書：日本語総合テキスト、文法・語彙・漢字などトピック別の参考書や問題集、日本語能力試験関連、読む・書く・話す(発音を含む)・聞くなどのスキル別テキスト、ビジネス日本語テキスト、辞書、各種データブック、マンガなど

◎雑誌、新聞、DVD（映画、ドラマ、ドキュメンタリーなど）、CD、小説など  
これらのリソースは受付の後ろにあるDVDやCDを除き、受付担当者に断らずに利用者が自由に手に取って選ぶことができるようになっている。貸し出しはしないが、同じ物が大学図書館に所蔵されていることが多いため、希望者には、そちらの利用を勧めている。また、留学生向け無料情報誌や文集なども置かれている。これらの出版物や視聴覚リソースの他に、パソコン6台および日本語PC利用の手引き、テレビも備えている。

こういった物的リソース以外に人的リソースも重要である。毎日1時間、日本語プログラムの教員が学習支援のために詰める時間を設け、日本語や学習方法について質問し、助言を受けることができるようにしている。受付の学生（日本人、上級の留学生）も貴重な人的リソースである。

#### (5) 利用状況

利用者数が正確に確認できる過去6年間のデータを見ると、毎学期の延べ利用者数は318～739名となっており、平均すると573名である。利用票の集計によると、2010年度までは学群留学生と交換留学生の利用者はほぼ同数であったが、その後徐々に学群留学生の比率が高くなり、2011年度からは学群留学生65～70%、交換留学生20～35%程度という状況が続いている<sup>7</sup>。サマープログラムの期間中はその参加者が利用する姿もよく見られ、また、少数ではあるが教員研修生など留学生以外の利用者もいる。

利用したリソースとしては毎学期パソコンが最も多く、インターネットによる調べもの、レポート作成、ドラマやアニメのDVD視聴などに用いられている。図書の場合は利用者自身の教科書などをCJLで使っていることも多いが、日本語能力試験が近づいてくると試験の練習問題の利用が増えるのも特徴である。

「3-2. 日本語科目の特徴と内容」にあるように、「日本語演習（チュートリアル）」と「日本語専門基礎B」では、学習者一人ひとりが自分で計画を立て、リソースを選んで学習を進めるため、多くの場合、学期初めの授業でCJLの「リソース探検」を行っている。これらの科目の履修者は授業中にCJLを利用することも多いが、その場合は利用票を記入しなくてもよいから、上記の人数はほぼ授業外の利用者であると考えられる。

#### (6) 運営体制・スタッフ

運営の方針は日本語プログラムの専任教員三名の話し合いにより決定し、うち一名が受付担当者の募集・手配やリソースの選定とりまとめ・購入・管理その他を含む日々の運営にあたっている。また、「チュートリアル」授業中の学生とそれ以外の学生の利用手続きの改善その他、CJLをより利用しやすくするための具体的な提案が、毎学期、日本語プロ

グラムの非常勤講師からも寄せられている。CJL 開室時間は受付のアルバイト学生が常駐し、利用のルール遵守の徹底、リソース整理などの業務を行う。

以上、日本語学習リソースセンター (CJL) を紹介し、利用状況を報告した。リソースセンターとしての CJL については、学期末に日本語プログラムが実施しているアンケートなどを通し、学生から高い評価が与えられているが、留学生向け各種情報の掲示、情報誌などの置き場としても活用されているフリースペースとともに、単なる語学関係施設以上の役割を果たしていると言えよう。フリースペースから CJL にかけての一带には、留学生を中心とした多くの人の流れができており、留学生が授業時間外に集える場所、一種のコミュニティとして機能している面もある。

今後の課題としては、恒常的な運營業務を引き続きスムーズに行うと同時に、「留学生」として入学しなかった故に一年次必修の「日本語専門基礎」などで CJL の存在を知る機会がない非母語の学生や編入留学生に CJL のことを知ってもらえるよう働きかけることが挙げられる。

## 5. 日本語クラスゲスト制度 (池田 智子)

日本語の授業に母語話者を「ビジター」として招き、教室活動に参加してもらうビジターセッションは、現在、国内外の多くの大学で行われている。桜美林大学の日本語プログラムはそれを一歩進め、単発または学期中 1～2 回程度の参加にとどまらず、日本語ボランティアが毎週またはそれに近い形で授業に参加する科目を多く設けているのが特徴である。こういったボランティア学生を日本語プログラムでは「クラスゲスト」と呼んでおり、人と人との交流を重視するという本学日本語プログラムの方針にそった学習環境作りの一環としてプログラム全体で募集し、運営している。以下に制度の概要と運用の実際を記す。

### (1) 募集方法

毎学期初めに約一ヶ月間、e-Campus<sup>8</sup> の掲示板 (大学および大学院の正規学生向け) に「日本語クラスゲスト募集」の案内を出す。それに加え、スクルーバスや学内でのポスター掲示による広報を行うほか、日本語プログラムと同様、基盤教育院の外国語教育デパートメントに属する中国語、韓国語のクラスにおけるチラシ配布も依頼している。毎学期、ゲスト経験者の友人から聞いたとして日本語スタッフルームにクラスゲスト制度のことを聞きに来る学生も多く、口コミの力も見逃せない。

募集案内には、①教師がいるので活動内容の心配は無用(過去の活動例として会話の相手、発表への質問やコメント、ディスカッションへの参加、一対一で共に調べものをする、漢字の授業で毛筆で字を書く、就職活動の体験について話すことなどが挙げられている)、②自分の外国語の練習のための参加は困る、外国語能力よりも難しいことを日本語でわかりやすく言い換える能力が重要、③授業なので遅刻・欠席の際は必ず事前に連絡をすること、④参加の頻度は学期を通して毎週参加するもの、単発または数回のものなどクラスによって様々、⑤登録者が多いため全員が授業に参加できるわけではないが、依頼する場合は授業担当教員から連絡がいく、今学期依頼がなくても来学期また応募してほしい等のことが書かれている。また、「申し込んだのに授業に来てほしいと言われなかった」という声もしばしば聞かれるため、日本語の各科目の授業担当者の予測に基づく曜日・時限ごとのゲスト必要人数の見込みを e-Campus で情報として提供すると同時に、ゲストを必要とする科目が多く開講されている午前中の時間帯への応募を奨励している。

参加を希望する学生は募集案内を読んだ上で e-Campus のアンケートに日本語クラスに参加可能な曜日時限、自己PR(応募の動機や特技)、連絡先、ゲスト経験の有無などを入力する。募集期間中、この情報は情報システムセンターの協力により毎週更新され、クラスゲストを必要とする授業の担当者は登録者一覧から自分の授業のニーズに合致するボランティア学生を探して個別に連絡を取るといった仕組みになっている。

## (2) 「ゲスト」登録者

2008 年度春学期からの記録を見ると、毎学期の登録者数は 120 人程度から 200 人の間を推移している<sup>9</sup>。2013 年度春学期は 201 人であった。このうち、教員から要請があり実際に授業に入ることができた学生の割合は学期によって異なり、43%～73%程度(平均 53%強)となっている。応募者の属性を見ると、全体的な傾向として男性より女性のほうが圧倒的に多い、学年や専攻は多岐にわたっているなどのことが言える。毎学期、リベラルアーツ学群の日本語教育専攻の学生も一定数応募している。

応募の動機について、杉原(2012)は 2010 年度秋学期の参加申し込み時のアンケートを分析し、以下の 3つのカテゴリーに分類している。

### 参加動機 (杉原 2012 より)

上位カテゴリー	下位項目
留学生と関わる	留学生と交流、留学生サポート、(自分の過去の)留学経験共有など
日本/日本語教育と学習	日本語教育を経験する、日本語学習サポート、日本・日本語を教える、伝えるなど
その他	レポート、大学生生活の意義付け、個人接触・友だち、教育経験、英語など

これ以降の年度・学期の志望動機は仔細に検討してはいないが、毎学期の「クラスゲスト一覧」の志望動機欄を見ると、現在でもこのカテゴリーは有効であると思われる。特に印象的なのが、自分も大学の留学プログラムで海外に行き、現地で色々お世話になったので今度は自分が桜美林に留学している学生の役に立ちたい、桜美林は留学生が多いと聞いて入学したが今まで留学生と接する機会がなかったのも、これをきっかけに国際交流をしたいといった動機で、これらは毎回聞かれる声である。また、外国語能力よりも、わかりやすい日本語が使える能力のほうが重要であると募集時に強調しているが、「英語ができなくても大丈夫か不安だが」といったコメントが毎学期見られ、「国際交流＝英語」というビリーフの根強さを実感している。また、「教える」のではなく、同じ学生として互いに学び合うピアサポートシステムであるということも、さらに理解を促したい点である。

### (3) 活動内容

前述の通り、授業にクラスゲストを呼びたいかどうかは科目の特性によっても異なっている。これまでの傾向としては、交換留学生の総合日本語科目である「コアクラス」<sup>10</sup>でオーセンティックなコミュニケーション活動を行う時間、選択科目である「日本語演習」のうち、「現代大衆文化」、「体験活動」、「口頭表現」、「チュートリアル」、学群留学生の初年次必修科目ではあるが交換留学生の「チュートリアル」と目的をほぼ同じくする「日本語専門基礎 B」、大学の専門の授業で求められる日本語力のうち「読む・聞く・話す」のスキルの養成を目指す「日本語専門基礎 AII」において決められたテーマで行うディスカッションなどで、ゲストの参加を依頼することが多くなっている。

活動内容の例は「募集案内」の①でも触れたが、科目により、ある程度の傾向が見られる。「日本語演習(チュートリアル)」と「日本語専門基礎 B」では、個々の学生の学習計画に基づいて教師がクラスゲストを手配するが、交換留学生、学群留学生共に、口頭運用能力向上のためにゲストとの練習を希望する学生が多い。「日本語専門基礎 B」では、毎回テーマを決めて会話をするほか、新聞記事を共に読んだ上で意見交換をするなどの活動を選ぶ学生もいる。「体験活動」では、日本語を使った様々な活動(料理、書道など)を留学生と共に体験することになる。「現代大衆文化」や「口頭表現」は、自分と同世代の日本の学生<sup>11</sup>と話し合うこと自体が特に大きな意味を持つ科目であると言えよう。また、2012年度の春学期に始まった、アメリカの提携校を対象としたサマープログラムの授業では、約一ヶ月という短期間にできるだけ日本の学生との交流を促進したいという狙いもあり、特に多数のゲストに参加を依頼している。

クラスゲスト制度に登録した学生への依頼状況は、日本語プログラム教員全員が共有しているファイルで随時更新することになっており、参加依頼を検討する教員は、それを見

て、一人の学生に依頼が集中しないよう留意している。

#### (4) 成果

日本語プログラムでは、学期末に実施する全学共通の「授業評価アンケート」と同時に、プログラム独自の授業アンケートも行っており、クラスゲストに関する学習者のコメントは、こちらに表れることのほうが多い。それによると、ゲストがいて「楽しかった」、「very helpful」などの肯定的なコメントが多く見られる一方、「Class guests were not helpful.」といったコメントもないわけではない。数は多くないとは言え否定的なコメントは、ゲストと学ぶことを自ら選んだ「チュートリアル」や「日本語専門基礎 B」ではなく、コアクラスでの体験に基づいていることがほとんどで、各人の学習スタイルや好みの違い、「知識を持った人に教えてもらいたい」という期待に反した結果からくるものと思われる。

「チュートリアル」や「日本語専門基礎 B」では、ゲストとの一対一による会話練習などの機会を存分に活用し、楽しんで学習を進めているケースが多い。特に初級に多く見られる「話すことがこわいので、それを何とか打破したい」という学習者の場合、教室での一斉授業とは異なった状況で口頭練習の相手をつとめてくれるゲストの存在を得難いものとしてとらえ、高い評価につながっていることが多い。また、ゲストからも留学生との接触を通して、今まで日本や日本語について気づいていなかったことに気づいた、異国で努力している姿に刺激を受けたなどの感想が聞かれ、まさに相互学習が起きている様子が窺える。多文化共生社会の縮図としてのキャンパスで、今後さらに充実させ、改善していきたい制度である。

## 6. ライティング・サポートセンター (WSC) (ミグリアーチ 慶子)

本節では「自立した書き手を育てる」という基本方針のもと 2013 年 5 月に基盤教育院に設立<sup>12</sup>されたライティング・サポートセンター (以下 WSC) の概要を紹介した後、日本語部門が行っている留学生サポートに焦点を絞って現状を報告したい<sup>13</sup>。

### 6-1. WSC の概要

WSC は現在のところ外国語及び第二言語のライティングのみを指導の対象<sup>14</sup>としており、英語と日本語のライティングについてチューターと呼ばれる指導員による一対一のセッション (相談) を提供している。これまでのいわゆる「外国語作文の指導」と比較して

特徴的なのは、添削をしないということと、書く前に内容や構成について相談に来ることを奨励していることである。いずれも「自立した書き手を育てる」という基本方針に基づいており、前者は、文章を直す代わりに直し方や直す観点を教え、いずれはWSCに来なくても自力で文章を直せるようになってもらうこと、後者は、書き始める前から始まる「書く作業」、つまりライティングのプロセスにもっと意識を向けることで、より主体的な書き手になってもらうことを目指している。

現在日本語部門は以下のような形で運営している。

開室日	授業期間中 週3日(月曜日・水曜日・金曜日)
開室時間	10:45～15:15(全6セッション)
場所	学術館4階 エレベーターを降りて左奥のスペース及びセッションルーム G412、414
対象	学群留学生、短期留学生(RJ・サマーコース)、基盤教育院での日本語授業を受講している別科生など <sup>15</sup>
受付方法	オンライン、またはCJL(日本語学習リソースセンター/学術館2階)受付横の予約表に記入、電話でも予約可 <sup>16</sup>
チューター	研修を受けた日本語教育専攻大学院生 6名
形態	一対一の相談、1回30分(続きの時間に予約がなければ延長も可)
指導の際の使用言語	主に対象言語(日本語作文の場合では日本語)ただし初級の学生で、対象言語では十分な意思疎通が難しい場合はこの限りではない。現在、英語、中国語、タイ語で対応可。

## 6-2. 利用実態

2013年春学期・秋学期(11/30現在)の利用実態は以下の通りである。

項目	2013年春学期	2013年秋学期(11/30現在)
予約可能なセッション数	171	156
実際のセッション数	41	119
稼働率	24%	76%
総利用者数(異なり数)	12	26
利用者の所属	学群5、RJ6、サマー1	学群18、RJ8

持ち込まれる課題は春学期は学群の専門の授業の課題、日本語授業の課題<sup>17</sup>、就職活動書類の三種に留まっていたが、秋学期はこれらに加えキリスト教科目、社会人基礎、口語表現のレポート、文章表現など多岐にわたっている。またいわゆるレポートだけでなく発表のドラフト、プレゼンテーション用のスライドなども持ち込まれるようになり、個人

的な文章、例えば大学院進学のための研究計画書、その進学相談の際に先生とやりとりするEメール、個人で発信しているブログの文章、日記などの持ち込みも増えた。また春学期にはほとんどの利用者が「ほぼ完成」の状態に来室していたが、秋学期は早い段階での来室が増え、利用段階の把握が可能な72件の内訳は、ブレインストーミング12、アウトライン2、途中24、ほぼ完成34である。

### 6-3. 利用者からのフィードバックと成功事例

利用者には毎回利用後に以下4つの質問からなるアンケートの記入を依頼している。

質問1. セッションは有益でしたか。(1～4)

質問2. 今日のセッションで文章が良くなったと思いますか。(1～4)

質問3. セッションで一番役に立ったのは何だと思いますか。

質問4. より良いセッションにするための提案はありますか。

質問1と質問2は1から4までのスケールで回答、4が一番高い評価である。回答の平均を出したところ、質問1は3.9、質問2は3.8という結果であった(回答総数61、集計は秋学期のみ、2013年11月11日現在)。質問3と4は自由記述で、質問3への回答42件の主なものは、文がおかしい原因がわかったこと、目次の作り方と考え方を教えてもらったこと、一緒に考えたこと、文章を書くときのポイントや書き方がわかったこと、テーマと調べたいことがはっきりしたこと、日本語らしい表現を教えてもらえたこと、などであった。質問4で具体的な提案があった4件はすべて、セッション時間の30分は短いのもっと長い方がよいというものであった。

チューターが記録している日誌によると、WSCでサポートしたライティングに関して利用者から、就職の成功(2件)、希望ゼミへの入室(2件)、ゼミコンペ予選通過(出場25チーム中8チーム)、スピーチコンテスト優勝(福建省教育省主催で中国で開催)、授業でほめられた、論述試験でまとまった解答が書けるようになった、クラスメイトに日本語力向上の理由を尋ねられた、などの報告が寄せられている。

### 6-4. 評価と今後の課題

春学期に利用が伸びなかったのは、主に、オンライン予約システムの入口がわかりにくいこと、広報が十分でできなかったことの二点が原因ではないかと考えられる。紙幅の都合で詳細は述べられないが、秋学期から試験的に予約の方法を簡便化し日本語学習リソースセンター(CJL)で予約表に名前を書くだけで予約できるようにしたところ利用者は飛躍的に増大した。また既に学習コミュニティとして機能しているCJLを経由するようにしたことでWSCの活動がより多くの人の目にふれることにもなり、効果的な広報活動が日

常的に行えるようにもなった。

多くの利用者が繰り返し WSC を利用していること、一番役に立ったこととして「文章がよくなったこと」よりも「書き方、考え方がわかったこと」をアンケートで挙げている点を見ると、WSC の趣旨は利用者にはよく伝わっており、WSC による留学生サポートは順調であるとひとまず評価してよいように思う。今後はチューターのさらなる技術向上のためのリソースや研修機会の充実と<sup>18</sup>、まだまだ不備の多い予約と受付のシステムをより使いやすく改善することが必要である。また Delgrego (2013) は WSC の役割に対する教員の誤解について言及している。日本語支援に関しては極端な誤解は少ないが、WSC の役割と機能について意見交換の余地はある。利用者のほとんどが教員の勧めで来室していることを考えると、教員間のさらなる対話は WSC のサービス向上と利用の促進のために有効に働くだろう。

## 参考文献

- 桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」(2007)『自律を目指すことばの学習 さくら先生のチュートリアル』凡人社
- 佐渡島沙織・太田裕子編 (2013)『文章チュータリングの理念と実践 早稲田ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房
- 杉原由美 (2012)「日本語プログラムが創る多言語多文化共生学習の可能性－留学生日本語授業「クラスゲスト」の応募動機に注目して」『OBIRIN TODAY』第 12 号、pp. 111-126
- Delgrego, N. (2013) A New Resource: J.F. Oberlin Writing Support Center (WSC) . 『ILE 通信』 Vol. 18. 桜美林大学言語教育研究所

## 参考資料

- 桜美林大学における「ライティング・センター」設立（案）について（桜美林大学基盤教育院内部資料）  
2012 年 11 月 21 日改訂
- 齋藤伸子 (2013)「日本語専門基礎」『OBIRIN TODAY』13 号、pp. 53-58
- 日本語プログラム (2013)「桜美林大学の日本語プログラム」(RJ 学生用ハンドブック)

## 注

- 1 留学ビザをもつ「留学生」以外の、日本語を母語としない学生を含む。
- 2 日本語授業や支援の対象となるのは日本語を母語としない学生であり、中には、子どもの頃に家族で来日して日本の高校を卒業した学生や日本の国籍を取得した学生など、留学ビザを持つ「留学生」ではない学生も含まれている。
- 3 学生の日本語レベルはプレイスメントテストによって決める。レベルとしてはⅥまでであるが、科目

- はVまでとし、VIレベルと認定された学生は必修の日本語クラスを持たない。VIレベルの学生の多くは、学群の専門科目等日本人学生向けの科目や日本語演習のみを履修する。
- 4 科目内容の記述は、齋藤(2013)および日本語プログラム(2013)を参考にした。
  - 5 学群留学生対象の「日本語専門基礎B」もチュートリアル形式で同様の狙いをもった科目である。
  - 6) 桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」(2007)より(一部改)
  - 6 この学生たちには日本語母語話者であることを示す名札を着用してもらい、留学生との交流が生まれることを期待している。また、教育実習生に対しては、実習期間中は登録せずとも実習準備のために、限定的ではあるが開放している。
  - 7 2012年度秋学期に318名と前学期比で約300名減少したのは、履修者の多い「チュートリアル」クラスが多く、その授業時間内の一般利用者を制限したことが関係しているのではないかという声があった。
  - 8 ログインして授業関係など学内の情報にアクセスしたり、科目履修登録や各種申請などをするための学内のサイト。
  - 9 このうち最も少なかった2010年度秋学期の数字は、学期半ばでゲストがさらに必要となり追加募集を行った結果の人数が含まれていないため、実際はそれより多かったものと思われる。
  - 10 授業時間数はレベルによって異なり、週に2～6時間となっている。
  - 11 ゲスト応募者は日本語母語話者に限っていないため、少数ではあるが、留学生の登録者もいる。
  - 12 WSCは外国語教育部門の英語プログラム(ELP)と日本語プログラムの共同運営という形でスタートした。設立準備と2013年春学期の運営は、ELPのニコラス・デルグレゴ、日本語プログラムの池田智子とミグリアーチ慶子が担当、2013年秋学期からはELPのデイモン・ブリュースターも加わり、現在4名で運営を行っている。
  - 13 「ライティング・センター」とはアメリカで確立され、世界的に拡大を続けているライティング指導のシステムである(佐渡島・太田2013, p.243)。本学のWSCもその流れを汲んでいる。
  - 14 将来は指導対象とする言語や、指導に使う言語の拡大、第一言語でのライティングへのサポート提供なども視野に入れられている。
  - 15 今のところ大学院生や教職員は対象としていない。
  - 16 2013年春学期はオンライン予約のみだったが、秋学期はCJLでの予約が主な方法。詳細は6-4を参照。
  - 17 前述のとおり、WSCでは添削をするわけではなく、チューターとのやり取りを通して学生自身が課題を完成させる。
  - 18 学群授業の内容について理解を深める、チューター同志の見学や他機関の見学をするなど。